

第78回日本消化器がん検診学会関東甲信越支部地方会
ワークショップ「胃X線検査の裾野を広げる教育体制」開催に向けて

近年、胃がん検診を取り巻く状況は大きく変化している。対策型胃がん検診としては、対象を50歳以上隔年検診とされ、内視鏡検診が認められた。一部の事業所検診においても同様のガイドラインが採用されることとなった。一方で胃がんリスク層別化検査（ABC分類）が徐々に普及しており画像診断を組み合わせ真の未感染者を特定する研究が進んでいる。「胃X線検診のための読影判定区分」では、萎縮性胃炎を考慮したカテゴリー分類が示されリスクの層別化に対応するものになっている。

本ワークショップでは、このような環境の中、診療放射線技師に求められる撮影技術、萎縮性胃炎を考慮した読影力の養成が必要であり、胃X線検査の裾野を広げる下記の教育体制について討論し、今後の教育体制の基盤づくりに必要な課題を探る場としたい。

- 1) 基準撮影法規定体位と追加撮影に関する教育体制
- 2) 画質向上と被ばく低減を目指す管理体制
- 3) 粘膜萎縮判定、リスク層別化に関する標準化構想
- 4) 読影判定区分に関する胃がん検診専門技師育成計画